

人形劇製作を通じた表現力の育成 (I)

安東 恭一郎・鈴木 政勝・瀬戸 郁子・藤元 恭子・松井 剛太・松本 博雄
(幼児教育コース)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

Development of Expressive Power through the Creation of Puppet Show (I)

Kyoichiro Ando, Masakatsu Suzuki, Ikuko Seto, Kyoko Fijimoto, Gota Matsui and Hiroo Matsumoto

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

要旨 本研究報告は2部構成となっており、本稿はプロジェクトの全体像と到達点を示すものである。本プロジェクトは人形劇クリエイターを育成している「とらまる座」に人形劇指導を依頼し、幼児教育コース教員が劇団員と学生との連携を支援する取り組みである。学生たちはこの取り組みを通して、人形劇が自分の思いを伝えるコミュニケーションツールであることを学び、その成果を学内・幼稚園で公開上演し、演じる喜びを味わう事もできた。

キーワード 人形劇 Web支援 授業記録 伝えたい気持ち コミュニケーション

1. 研究プロジェクトの目的

幼児教育実践において求められる力量はさまざまであるが、近年、支援者としての教育技術や知識と共に教師・支援者自身が豊かな表現力を持つことが強く求められている。表現力とは、言語表現能力、身体表現能力、造形表現能力など多岐にわたる。総合芸術としての「演劇」はこれら表現能力を総合的に関連させたり、学生同志協同で表現力向上を目指すことができたりする育成場面として期待できる。これまで、幼児教育コースでは所属する教員が、「演劇活動」を軸とした表現力育成を授業「児童文化」の中で、それぞれの専門的力量を生かしながら指導にあたってきた。一方で、より表現力を高め深化させていくためには、幼児教育コース教

員の「演劇指導」や「舞台装置の制作」など、より専門的な知見の獲得が必要であった。そこで本研究プロジェクトでは、香川県はもとより全国から人形劇研究所・人形劇養成所として知られている「香川県・財団法人とらまる人形劇研究所・附属人形劇学校」劇団員に授業内でのワークショップ企画を依頼し、演劇を通じた表現力育成を目指すこととした。

2. これまでの取り組み

幼児教育コースでは授業や授業外でのさまざまな取り組みを通して学生たちの表現力育成を目指してきた。特に「児童文化」の授業では、グループで紙芝居製作やペープサート製作に取組み、総合的な表現能力を育成したり、クラ

ス内で発表することでお互いの表現力を検証したりしてきた。また、学外においては毎年実施する幼児教育コース合宿において、身体表現活動などを充実させてきた。平成22年度合宿では、香川県東香川町にある人形劇団「とらまる座」を二日間にわたって訪問し、そこで人形劇のワークショップを受けたり、地域の民話に基づいた人形劇を鑑賞したりした。「とらまる座」でのこうした体験は、学生たちにプロが取り組む「ほんもの」との出会いの場面となり、人形劇の持っている独特の魅力や奥深さを知ることとなった。

3. 本研究プロジェクトの構想

本プロジェクトでは、授業「児童文化」における「演劇指導」に関して香川県を拠点として全国の人形劇クリエイターを育成している「とらまる座」の劇団員に演劇・朗読・パントマイム等に関するワークショップの企画・開催を依頼する。ワークショップについては、幼児コース教員が依頼内容を検討し、「とらまる座」教員との打ち合わせを通して決定していく。

この授業を通して、学生たちに人形劇の持つエネルギーやノウハウを獲得させる機会を設けると共に、「児童文化」の中で実施していただくワークショップに教員が授業観察者として参加することで、劇団員の指導について学ぶ。

また、このプロジェクトを通して「児童文化」受講生は人形劇制作における脚本制作から人形製作、そして舞台づくりなど、学びの内容は多岐に渡る。

加えて、学生たちが人形劇を自演できる段階まで到達した後、そのパフォーマンスが幼児の前で演じられた時、どのようにそれを受けとめてくれるのかを実際に近隣の幼稚園等に出向き検証する。そして、演じる事と見られる事から得られる表現体験全体を味わい、しかも自分たちが地域・子どもたちの喜びに貢献できることを実感することを期待し、このプロジェクトを開始した。

4. 本プロジェクトの独創性

(1) 連携し継続的な支援を可能にする WebWikiによる授業の実施

本プロジェクトではWebWiki（以下Web環境）を用いることで、授業前・授業後の学習場面を準備する。このシステムを用いることによって、学生たちは授業実施内容を確認できるだけでなく、自分たちの課題をアップロードしたり、添削指導を受けたりして授業に備えることができる。

また、とらまる人形劇団の支援が学外から常時可能になるので、大学に訪問しなくても遠隔地からの支援ができる。

さらに、このシステムはWeb環境や携帯電話から閲覧や書き込みができるので、授業外のグループ作業において、学生同志が時間調整して集まる必要もない。また、他のグループの取り組みを閲覧したりコメントを書き込んだりできるので、自分たちのグループ活動の状況を相対的に捉えることができる。

(2) 人形劇団と学生そして大学教員の連携による授業の設計

本プロジェクトは、実施する授業の内容を充実させるため、地域で活動する力量ある組織・人材と連携していくことを目指すものである。

本学教員はこのプロジェクト全体を通して、人形劇支援の方策を学ぶとともに、人形劇・指導員が学生を支援し、学生が連携できるように積極的に支援する。そのため、常時とらまる人形劇団員と連絡を取り合いながら授業の準備を行うと共に、毎回実施される授業の記録や課題をその都度Web上に提示し、学生たちが授業外でも製作の振り返りや進行状況の確認をしたり、とらまる人形劇・指導員が授業外での学生の取り組み状況が把握できたりするようにする。

これら学習環境を準備し運営する事で、学生たちは教員と学生、学生同志とが連携して人形劇製作に取り組む事ができ、初めての人形劇製作を園児たちの前で上演できるまでに成長することが期待される。

5. 本プロジェクト実践報告の構成

本プロジェクトの取り組みの成果と課題を提示することを目的とし、本報告書は2部構成とする。

第1部（本稿）では、プロジェクトの全体構想と取り組みの全体像、人形劇に取り組んだグループそれぞれの課題と取り組み、などを提示すると共に本プロジェクトの到達点を示す。

第2部では、本プロジェクトにおけるグループ活動の中で1グループを対象として、その活動履歴を事例とし、第1部では取り扱うことのできなかった学生グループの変容と到達点を人形劇製作各場面の記録から実践的に検証する。

6. プロジェクトの準備と交渉

(1) 本プロジェクトの目的と内容の共有

本プロジェクトを開始するにあたり「とらまる人形劇」にこの企画を受け入れてもらえるのか、どのようなプランで実施できるのか、そしてこのプロジェクトを通してどのような力量を養成するのか、そして内容構成をどのように計画するのか、といったことを事前に確認する必要がある目的と内容について検討の場面を持ち協議した。

この検討の場面で確認された事項は以下の通りであった。

(2) コミュニケーションツールとしてのパペット

自分の思いを伝えるためには、まず言葉が大切である。そしてその思いを言葉でどう伝え、どう演じるのか、どうしたら自分の思いが伝わるのかについて、自分を見つめ直す場・思いを伝えるエクササイズの場として人形劇を利用する。そういう経験の場、ツールとして人形劇・公演練習を行う。

(3) 人形製作よりもコミュニケーション能力の育成

授業回数も限られているので、人形制作や舞台づくりに少ない時期を費やすのではなく、例えば出来合いの舞台を各班で使い回して利用し

たり、人形制作には既成のキットを使う等して済ませたりする。そして、何よりも演劇者である「学生が人前で物怖じせずしゃべれる・パフォーマンスができるようコミュニケーション能力を鍛えていく」方に、授業の重点をおく。

(4) 人形劇のシナリオ・テーマについて

題材・脚本についても、すでにある『人形劇作品集』等を利用する。テーマについては、学生が初めて扱う内容だと幼児がすでに知っているテーマ（例えば『桃太郎』など）の方が分かり易い。とらまる劇団でも『四国の昔話』などよく知られた話を基にして、独自に脚本化して題材にすることもあり、人形劇では知っている話を脚本化していくことはよく行われている。

(5) 学外に発表の場面を設け、明確な目標をたてる

一昨年から『さぬき子供の国』で行われる12月のクリスマス公演では、保育専門学校・私立高松大学・高松短期大学の学生による人形劇発表・読み聞かせ・手あそび・演劇などの発表会の場面となっており、最後にとらまる劇団の公演をしている。そして、この発表会の終わったあとに4校で合評会をしている。

この発表会に香川大学として参加するということを授業の前に告げれば、学生たちもクリスマス会に参加することを目指して人形製作・公演練習をするという明確な目標ができる。人形劇製作を授業内で完結させず、外部での上演を設定することが必要である。（この話し合いの段階では12月末頃には人形劇がおおよそでき上がっていることを想定していた。実際には授業日程上、12月末時点上演の段階までは至っていなかった）

7. 「児童文化」実施日程カリキュラムの通知

(1) 授業案内

本プロジェクトを実施するにあたり学生たちには以下のような授業案内をした。

本年度の「児童文化」は予定の授業に「プロジェクト授業」を加え、香川県東かがわ市・と

らまる人形劇団の指導員の方を講師として招き(講師は川田先生と決定した、以下川田講師とする)、人形劇製作の指導を依頼する。この授業では、専門家の指導を受けることで一定の人形劇上演のレベルを達成し獲得していくことを目的とする。

また、この授業ではグループ制作を基本とし、授業課題が毎回出され、それをWeb上にアップロードしてとらまる人形劇団の指導を受けることも授業の活動に含まれているので、授業内だけではなく授業外の課題をこなしていくことも必要となる。

(2) 授業カリキュラム

本プロジェクトは授業「児童文化」内で実施され、授業は以下の日程で集中によって行なうことを通知した。

第1回：脚本製作指導・演習(11月13日)

第2回：人形劇製作指導・演習(12月4日)

第3回：大道具製作指導・演習(12月11日)

第4回：小発表会・中間まとめ(1月22日)

第5回：本発表会準備(2月19日)

第6回：本発表会(外部発表会・2月20日)

外部発表会は附属坂出幼稚園および附属高松園舎にて実施された。また学内においても授業外の学生に呼びかけ上演会が企画され実施された。

8. 第1回授業までの取り組み

(1) 人形劇製作グループの決定

第1回授業に先立ち、受講を希望する学生を集め、12名の受講生を4つのグループに分け3名で1グループを構成することとした。なお、この授業には卒業研究で人形劇を研究している2名の4年生も第3回授業まで参加した。

(2) 構成台本の製作

第1回目の授業が行われるまでにWeb上で、構成台本の見本の例示、それを受けて構成台本の提示・添削指導が2回に渡って行われ、4グループがおおよそその人形劇製作の方向性を持つ段階までになった。したがって初めての授業までに学生と川田講師は連絡のやり取りをして

おり、既に人形劇製作は開始されている状態であった。

9. 第1回授業・構成台本の検討

(1) 授業の内容

第1回の授業(11月13日)を迎えた学生グループは10月6日の授業説明会以降、既に一ヶ月以上かけて構成台本製作に取り組んでいた(この説明会で受講を希望した学生12名を3名・4グループに編成し、グループ名をそれぞれAからDまでとした)。

第1回授業における指導の内容は「人形劇を通してどのような思いを伝えていくか」という課題を追求する場面であった。

学生たちが最初に提示した構成台本の内容は、既にあるお話を基に楽しく演じることができ、残酷な場面を避けて内容も複雑にならない「お話をわかりやすく人形劇に仕立てる」脚本を製作していくことが柱となっていた。

これに対して川田講師がこだわったのは演じようとする人形劇は、どのような思いが込められているのか、何を子どもたちに伝えようとしているのか、そしてそれをどう脚本にしているのか、ということであった。

この指導・こだわりは、本プロジェクトの目的でもある「人形劇を通して思いを言葉でどう伝えていくか、どうしたら自分の思いが伝わるのかについて、自分を見つめ直す場・思いを伝えるエクササイズの間として人形劇を利用する。そういう経験の場、ツールとして人形劇・公演練習を行う」という中心的なテーマを達成するのに重要な場面でもあった。

以下に今回支援を受けた各グループの支援の内容について提示する。なお支援対象グループAの支援については第2部(別稿)で詳細に検討するので、本稿ではグループB、C、Dについて記載する。

(2) 各グループへの支援

① グループB「子どもが嘘をつく時の思い」

・構成台本の概要

ピノキオをもじった「ヒノキオ」の物語、原

作ピノキオは嘘をつく度に鼻が伸びるが、ヒノキオは足が伸びる、足は伸び続けついに月さままで届いてしまう。お月さまでは誰とも話が出来ず孤独になったヒノキオは改心し、これまで傷つけた友だちに（反省の）手紙を出すごとに足が短くなりついににはおじいさんの家に戻ることができる、という話。

・支援の内容

この構成台本の課題は、最初のヒノキオの説明が複雑な点、嘘をつき続けるヒノキオの心情描写が描ききれていない点、お月さまにまで届いてしまい孤独になったヒノキオが反省し改心する現れとして「手紙を書く毎に足が短くなる」ことが方法として示されている点を取り上げられた。

これらの場면을改善する具体的事例として最初のヒノキオの登場説明では「・・ピノキオの住む町の隣にゼッペキ爺さんが作った人形・ヒノキオがいました、と子どもたちが知っているピノキオの話を下敷きに出し、ヒノキオのお話のオリジナリティをく嘘をつくと足が伸びる」とする。そしてヒノキオの心情描写としてく足が伸びる」ことはく目線が高くなり、このことはくえらくなったような気がしてくる」とことと関連していることを知らせる。そして、それは同時にく友だちとの距離感が生まれてくる」ことでもあり、ヒノキオは孤独になり友だちに本当の気持ちをますます言えなくなり嘘をついてしまう。足はどんどん伸び続け雲の上まで届いてしまい、そこでカラスからくおまえ何やってんだよ！>と言われるが、ヒノキオはそこでも素直になれずくうるさい！あっちいけ！！>とカラスを追っ払う。ついにヒノキオは月まで届いてしまい、誰もそこにはいなくて悲しくなるが、その時月がヒノキオにくどうしてそんなことになったの？>と話しかける。そしてヒノキオは自分のつらい気持ちを月に話す・するとヒノキオは目が覚めて全てが夢だったことを知る」といった展開事例をアドバイスした。

ここで川田講師が重視したのは「子どもたち

に嘘をついてはいけない、という禁止的なメッセージを人形劇によって伝えるのではなく、自分で状況を理解し、自分で自分の問題を受け止めたほうがすっきりする」といったことを人形劇に込める、という支援であった。

② グループC「個性の伸長は、成長によって現れる」

・構成台本の概要

生まれてくる子どもたちには、神様がそれぞれに贈り物（個性）を与えている。この構成台本案では生まれてきた三つ子の赤ちゃんに「歌が好き」「よく食べる」「力持ち」という贈り物をする。月日が流れて神様はその子どもたちの様子を見て自分が何をプレゼントしたかを思い出す。最後に三つ子たちはそれぞれの個性でお母さんに感謝を表す、という話。

・支援の内容

この構成台本の課題は話の流れが全体に単調でメリハリがないこと、そこでどのようにしてインパクトがある部分を流れ全体に配置していくかを工夫していく必要がある、またメリハリをつけるためには人形製作以上に演技に時間をかけ、子どもたちを惹きつける人形劇としていくこと、また神様の存在感を出していくこと、などが指摘された。

これらの改善のため、出だしの神様の登場のシーンで「・・わしは誰だっけ??」といきなり神様が子どもたちに質問を投げかける。すると子どもたちは神様に扮した演技者の姿かっこうを見て「おじいさん！サンタ！」など発言機会を得て話に引き込ませる。神様は「・・お爺さん??・・そうだったっけ??・・そうじゃ私は神じゃ！」といった神様に注目させる場面から始める。この構成台本では赤ちゃんが産まれる病院が場面として準備されているが、舞台設定が煩瑣になるので家で赤ちゃんがゆりかごなどで泣いているシーンから始めるほうが後に続けやすい。

第3場で神様が赤ちゃんに与えた贈り物（個

性)を思い出すシーンでは、それぞれの特徴を長所ではなく、短所によって強調するよう演技をする。例えば「歌が好き」は「声がとても大きい・うるさい」で、「よく食べる」は「食いしん坊・料理ばかりしている」で、「力持ち」は「重たい道具が動かせる・動作が大きい」など特徴にメリハリをつける。そして、最後のシーンではそれぞれの特徴・個性がお母さんへの感謝となるような演技「お祝いを歌で表す」「得意な料理をふるまう」「テーブルを準備する」などで長所を強調する。こうした「特徴(贈り物)・短所の表現・長所による感謝」の流れを演劇全体のメリハリとすることができる、といった事例を例示された。

ここで川田講師が重視したのは演劇全体を神様のお話・偉大な存在に対する感謝として表現するのではなく、第一義的にそれぞれの個性の伸長が「子どもの成長」によって現れるようにしていくこと、そしてそれが母親への感謝として表現されることが重要であるということだった。

③ グループD「オオカミを受け入れる思い」 ・構成台本の概要

3匹のこぶたが一斉に「この部屋はせまい!」というシーンから始まる。そこで3匹のこぶたはそれぞれ「わらの家・木の家・レンガの家」を作り個別に暮らす。そこにオオカミが訪問してくるが力が強すぎて、わらの家、木の家を破壊してしまう。最後にレンガの家を訪ねてくるが頑丈なので壊れない。ところがオオカミはそこで意外なことに「ただ遊びたかっただけに・・・」と泣き出し、3匹はオオカミの本当の気持ちを知り、オオカミと協力して4匹で住む家をつくる、という話。

・支援の内容

この構成台本のラストに向かう重要なシーンで、3匹のこぶたは「オオカミくんは僕たちと遊びたかっただけなのか!」とオオカミを受け入れ、こぶたたちと一緒に住む家を作ることになっているが、演技者は本気でこのせりふを子

どもたちの前で言うことができるのだろうか。家を破壊され恐怖の気持ちで迎えたオオカミに対して「遊びただけだったのか、じゃあ入れてあげる」と本気で言えるのかどうか問われる。演技者は人形劇の中で本気で言えるせりふで子どもたちに語りかけないと伝わるものも伝わらなくなる、との指摘を受けた。

そこで、この構成台本の骨格について再確認し、台本を見直していくこととした。

こぶたたちが「この部屋はせまい!」と感じる最初の場面は物理的な苦情としてではなく、子どもたちがそれぞれの空間がほしい、プライバシーがほしいといった精神的成長としてとらえる。自分たちそれぞれの家が完成してもここでお互いが喜んでしまわず「おまえの家ほろ、そっちこそセンスない、こっちの方が住みやすい」などけなしあい、またケンカが始まる。ところがそこに「オオカミ」という外的な脅威が3匹にふりかかってきて、次々に家が破壊され、最後に残ったレンガの家は3匹共同の砦となりオオカミの脅威をはねかえすことができる。3匹はこの経験を通してこれまでばらばらだった気持ちを一つにまとめることの大切さを学び、3匹で一緒に住むことにむしろ親密さを感じるようになる、といった展開が提案された。

オオカミの扱いに関しては、例えば「いっしょに遊ぶ、同じ家に住む」という展開ではなく、オオカミに「・・・おながすいていて、食べるものをもらおうとしていただけなんだ」と言わせて、食べ物・物質的な提供によって両者の関係を友好的に展開する、ということであれば受け入れられるのではないかと。つまり、精神的な許容はそう簡単ではないので安易な和解とするのではなく、まずは物質的な提供・交換を場面設定することで子どもたちも納得してやりとりを受け入れることができるのではないかと、という提案があった。

この支援の強調点は、「遊びたかっただけに・・・」というせりふを本当に照れずに言えるのか、本気で言えるのか、といった場面の扱いについてであった。その事例として、子ども

たちの中で多数派が孤立する一人の子どもを取り巻いて状況のないじめのような構図になったとき、いじめられている子どもの「ただ遊びたかっただけなのに・・・」といった発言を子どもたちはそれだけの言葉でちゃんとその子を受け入れることができるのか、このせりふを照れながら言ってしまうと、子どもたちも照れて言わなくなってしまう。内容としては大切なテーマを扱っているのに、演技する君たちはもっともっと考えてほしい、といったアドバイスを受けた。

(3) 第2回授業までの課題・「脚本作成」の取り組み

第1回授業後、第2回の授業までに各グループが取り組む課題として、第1回授業で検討した「構成台本」をもとに「脚本制作」を行い、各グループページにアップロードするよう指示された。その際川田講師が予め「脚本」の事例をWeb上に提示するので、それを参照する事とされた。第1回授業後に指示された予定は以下の通りであった。

- ・ 11月下旬までに脚本第1校をアップロードし川田講師からコメントをもらう
- ・ コメントを参照し、脚本第2校をアップデートする。
- ・ 第2回授業（12月4日）までに各グループで人形製作を進めておく。

また、人形製作に平行して各グループが準備した「構成台本」を脚本化していく方向性についてアドバイスを受けた。

各グループはこの授業までに構成台本に対する添削指導を受け修正を重ねてきた。この授業では改めて、川田講師がそれぞれの構成台本の課題を指摘し、課題を乗り越えていく方策について提案したりグループからの意見を聞いたりしてストーリー展開を練り直して行った。

そして、練り直した内容に則しながら、人形劇に登場する人形は、どのような形態や動きが求められるかについて再度検討し、それぞれのグループはそれぞれに相応しい形態の人形作りに取り組むこととなった。

10. 第2回授業・脚本の検討及び人形製作の開始

(1) 授業の内容

第2回授業では、まず、第1回授業以降に課題として作成した「脚本」の再検討を行っていった。また、脚本支援と共に、それらの状況をどのように人形の形態や表情として演じるのか、また振り付け・仕掛けなどについての検討、そして必要となる小道具・大道具を確認するなどの製作支援を受けた。

川田講師は、それぞれのグループが既にアップデートした脚本を手にして、個別に話し合いの場面を持ち、それぞれの課題を指摘した後、ストーリー展開をグループメンバーと話し合いながら以下のように作り上げていった。

(2) 各グループへの支援

① グループB「こどもの嘘・プライド・自慢」・人形の制作・提示

原作ピノキオの場合、嘘をつくと鼻が伸びるが、この人形劇・ピノキ（構成台本ではヒノキオとしていたが聞き取りにくいのでピノキに改名した）は足がどんどん伸びていく設定となっ

ている。この演出を実際の人形でどう表現するか、が課題の一つであった。今回この課題に対する解決法として川田講師自ら「足がどんどん伸びるピノキ」を制作し使用することとした。ピノキの足は最初胴体についているが、引っ張るとどんどん伸びていき最大1.5メートルの高さまで伸長する仕組みであった。

この人形劇で大切なポイントとして「子どもの嘘」「子どもの自慢」をくみとった演出ができるかどうか、であると指摘を受けた。



<図1：ピノキの足を伸ばしたところ>

・内容展開の再構築

ピノキは自分で動く事が出来るようになると、ゼツペキ爺さんの家から町に出て、嘘をついたり自慢したりする。その度に足が伸びる。町から帰ってきたピノキ（足が伸びている）に対してゼツペキ爺さんはピノキに「町はどうだった、楽しかったかい？」と尋ねる。するとピノキは「楽しかったよ！」と答える。お爺さんは「おまえ本当に嘘はついてないだろうな」、ピノキ「全然ついてないよ」すると、またまた足が伸び、ピノキは雲の上まで届いてしまう。

そしてそこで出会ったからすに「何してんの？独りぼっちで寂しいんじゃないの？」と聞かれたピノキは「寂しいわけないよ！」と強がりの嘘をつく、するとまた一気に足が伸びてしまう。そしてついに月の上までたどり着いてしまう。

月まで伸びたピノキはつぶやく「・・・ああ、こんなとこまでできてしまった。ああ、寂しいよ・・・」ピノキは一人になった時初めて自分の気持ちを吐露できる。誰かがいたら本音は言えない。それがプライド、子どものプライド。だから（自分の近くに）誰かがいたら泣いてしまう。誰もいないと泣かない。それが子どもの気持ち（大人と正反対）。

「寂しいよ・・・」と吐露したピノキに対してお月さまが話しかけピノキが答える・・・「寂しいの？」「うん（本当の気持ちが言える）」「お爺さんに謝りなさい、そうしたらもとの姿に戻してあげるよ」「わかった・・・」すると一気に戻ってもとのお家に帰って眠りからさめる。そして、お爺さんのところに言ってピノキは話す「おじいさん、おじいさん、ほくね、もう嘘つかない」、おじいさん「ほんとか？」、ピノキ「うん」、とうなずく（自分の足を見て）「あっ、足が伸びてない！お爺さん大好き！！」・・・でおしまい。

ピノキがつく嘘は友だちにつく嘘（ほくはもっとすごい）、カラスにつく嘘（一人でも平気）、そしてゼツペキ爺さんにつく嘘（嘘を言っていないかい？と聞くお爺さんに嘘を言っていない、と嘘をつく）。このお爺さんにつく嘘は前

の二つの嘘を格段に越えた嘘であることを足の極端な伸びで表す。

② グループC「ペープサートに表情をつける」 ・ペープサート人形劇の課題

このグループは、ペープサートを用いる人形劇なので、ペープサートの人形や小道具をどのように表現するのか、どのように動かすのかについて検討する必要があった。

グループCが準備したペープサート・人形は正面を向いた立ちポーズのもので、これは登場人物を示すのには分かりやすいが、さまざまな動きを表しにくい。どのようなポーズをした人形が必要になるかは、人形を作る前に絵コンテをつくって、そこから必要な人形を決めるとよい、とのアドバイスを受けた。

紙で作る平面の人形・ペープサートは、立体的な人形より平易な手法と思われ、人形劇の初歩的な段階だと見られることがある。人形を紙で作る作業自体は立体物より手順も少なく、用具や技法は簡易なのだが、一方で形態や表情を立体的な人形のように変化させることができない不自由さがある。

したがって、ペープサートで作る人形の形態や表情をどのようにするのかは、上演する状況を（できれば絵コンテなどで）イメージしながら、吟味していかねばならない。グループCの取り組みでは、劇中に登場する人物を一つの形態や表情だけで表すことはできないので、一人の登場人物について複数のペープサート・人形を準備していく必要がある。

また、複数といってもできるだけ少ない枚数で上演できるような工夫（例えば手の位置を正面で閉じてしまわないで、動きをつけると表情を演出しやすくなる）も求められる。加えて、ペープサートには裏表があるが、表裏に異なる表情や全く異なるものを配置することでストーリー展開を躍動的に見せることもできる。

簡単に見えるペープサートだが、実は立体人形以上に事前のイメージ準備やよく考えられたポーズや表情の人形が必要であることが指摘された。

・劇中の「見せ場」「動き」をどのように演出するか

グループCの演劇は、対話中心の展開なので発話と動きをどのように結びつけ、「見せ場」をいかにして演出するのかが課題となる。「見せ場」の作り方の基本として、動きの繰り返しを演出する中で、3度同じ動作を繰り返す場合「いち、に、さん！」と2度目までは同じ（静的）動作をし、三度目で大きな（飛躍的）な動作をする、（あるいは「いち、に、ご！」「いち、に、なな！」）といったふうにメリハリを作っていく（あかちゃんの泣き声が三度目に極端に大きくなる、するとお母さんのあかちゃんの世話が大変なんだあ、ということが直感的にわかる、など）演出について支援があった。

また、劇中でさまざまな動きを表したペープサートを準備（歩いている絵、泣いている絵、横向きの絵など）し、動きをつける、ストーリーをつけるアドバイスも受けた。

③ グループD「恐ろしいオオカミをいかにして受け入れるか」

・オオカミとこぶたを巡る課題

このストーリーの最終場面ではオオカミとこぶたたちが楽しくいっしょに遊ぶ（暮らす）ということになっている。恐ろしいオオカミから逃げて行くこぶたと一体どのように折り合いをつけるのがストーリー全体を通して無理なく収まるような展開が求められる。すると、オオカミがこぶたたちの家を訪問する理由・動機をどのように演出するのか、こぶたたちがオオカミを受け入れる状況をどうつくるのかなどが課題となる。

オオカミがこぶたたちを訪問する理由として、例えば「遊び相手を探していた」とする。そして物語の展開を以下のようにしていく。

・オオカミが歩いていたら偶然家を見付ける、そしてノックしてみる、返事がない「誰もいないのかな？」とその時おもわずくしゃみをしてしまう。するとそのくしゃみで「ワラの家」が吹き飛んでしまい、そこからこぶたが飛び出す。「ぶたがいたんだ」。オオカミは次の家に

行く、ノックをする。応答がないのでさらに強くノックすると木の家はガラガラと崩れてしまう。こぶた2匹が驚いて飛び出し逃げる。オオカミ「・・（2匹に）増えた」・・そしていよいよ最後のレンガの家を訪問する。そして・・オオカミは家に入れない・・「遊びたかっただけなのに・・」とつぶやく。

・家を破壊されたこぶたは「遊びたかった・・」だけの理由だからといってオオカミを受け入れられるか

「遊びたかっただけなのに・・」というオオカミのつぶやきを聞いて、こぶたたちは自分が勘違いをしていたことに気づきオオカミといっしょに遊ぶという設定に無理がないか、ということが指摘された。仮にも自分たちの家を2棟も倒壊させ恐怖に陥れた者を簡単に受け入れることができるのか、ということについて考えていく事になった。

くしゃみで吹き飛ばす家、ノックしたら崩れる家はふつう有り得ない。有り得ないような（コミカルな）状況を演出することでシャレにしてしまう。これができるのも人形劇の特徴。これが着ぐるみで演出するような劇であれば、くしゃみで吹き飛ばすような仕掛け作り・場面作りは相当難しい。家を壊されたことを恨むのではなく、自分たちが勘違いをしていた、ということに問題を集中させる。オオカミは怖いと思っていたのに、そうでもなかった、勘違いだったと笑い飛ばす。そういうすり替えをすることができればこの問題は解消できる。

・オオカミとこぶたのコミュニケーション不足をテーマとする

子どもたちと楽しむ人形劇では、ストーリーを複雑にしないこと、状況説明が多くなりすぎないことが肝要。また扱う状況が子どもたちにとって身近になりすぎると、深刻な問題として受け取ってしまう子どもが出てくる。

例えばオオカミが引越してきて友だちがいないから寂しくて家を訪ね歩いている、でも友だちから逃げられてしまう、という背景・状況説明をすると、子どもによっては「なんか、自分のこと言われているのかなぁ・・」と感じ

て見てしまう場合がある。

すると、突然人形劇が自分自身の問題となっ
てしまい、笑い話としてではなく、自分自身の
傷となってしまうこともある。

だから（背景・状況説明をしないで）、ひま
だから遊び相手を探している、でも逃げられ
た、遊びに行っただけなのに勘違いされた、な
んだ遊びただけだったのか、だったらいい
よ・・・とシンプルで誰でも共感でき、あり得
るような状況を設定するほうがいい。

オオカミの演出については、なるべく口数が
少ない、無口にすることでリアルな状況を作る。
オオカミは自分の気持ちをほとんど語らない、
少ない言葉をこぶたが取り上げ、ああでもない
こうでもない、いろいろ（勝手に）解釈
させる。オオカミとこぶたたちが同じレベルで
会話してしまうと、なぜこぶたたちがオオカミ
を勘違いしていたのかが分からなくなる。だか
らオオカミの心情としては「寂しかったんだ・・・」
というより「仲間に入れてよ」ぐらいの気持ち
で演じる。またこぶたたちは「オオカミだ、オ
オカミがきた」とオオカミ一般に対して怯えて
いるのであって、目の前のオオカミは実は怖く
ない、ということが分かっていない。この誤
解・勘違いが解けたとき「えっ？怖くない、じゃ
あいっしょに遊ぼう」という気持ちの変化を演
じることができる。

（2）第2回授業から第3回授業までの取り組み

それぞれのグループは、これまで2回の授
業、及びその間Webサイトを利用した支援に
よって「人形製作」「脚本製作」を進めた。第
2回授業から第3回授業の間Webを利用した
支援では脚本を作り込み、川田講師からグル
ープごとに具体的な脚本案も提示され、各グル
ープはそれを受けて脚本を作り直した。

また、それぞれのグループは第2回目授業か
ら製作し始めた人形や小道具を写真撮影し、そ
れらをアップロードし製作状況を公開し、川田
講師の助言を受けた。第2回授業後も各グル
ープで脚本製作と添削指導が行われ、おおよそ脚
本ができ上がったところで、第3回授業を迎え

ることとなった。

11. 第3回授業・段取り稽古の開始

（1）授業の内容

第3回授業では人形製作の完成を目指し、併
せて人形劇に必要な小道具の制作も行い、いよ
いよ脚本に基づいた「段取り稽古」を開始した。

でき上がった台本と人形・小道具を用いて「段
取り稽古」が始まった。舞台は第2回授業で川
田講師があらかじめ作り上げ、幕はまだ張られ
ていないが、人形劇を上演するスペース・高さ
が確認できる骨格だけの舞台を用いて、それぞ
れのグループに対する指導が行われた。



<図2：グループ3名で、オオカミとこぶた3匹、
および家を同時に演じなくてはならなくなるの
で、配役や動きなどの段取りが必要になる>

この「段取り稽古」の様子はビデオ記録さ
れ、Web上に置かれた。そして、それぞれの
グループは授業後この支援の場面Web上で見
直し、次回最終授業の小発表会（2011年1月22
日）に向け演技練習を重ねていくことになる。

（2）第3回授業から第4回授業の間の取り組み・通しで上演し録画する

第2回授業では段取り稽古の支援を受けた
が、全体で通してみる場面まではいかず、第4
回授業・発表会に向けて通して上演してみる場
面が必要であった。そこで1月20日に各グル
ープの通しでの上演会を実施し、ビデオ録画す
ることとした。そして録画された上演会はWeb
上に置かれ、自分たちの演技を各自のPC上で
確かめ、第4回授業に備えた。

12. 第4回授業・人形劇・授業内発表会

(1) 授業の内容

10月から取り組んできた「人形劇支援プロジェクト」においてとらまる人形劇・川田講師の指導は第4回授業が最終日となる。授業は4回だけであったが、授業と授業の間にWebへのアップロード、添削、あるいはビデオ撮影による中間報告などをはさみながら、台本の構想、脚本作りを経て、人形製作、そして演技の稽古と密度の濃い学習内容であった。

そして第4回授業では、全体発表に先立ち、川田講師からそれぞれのグループの通し演技に対し30分ずつ程度指導が行われ全体発表会に備えた。

個別の指導が終わったところで、4つのグループが順番に演技を行った。4グループは同じ教室・演習室で活動してきたが、通しでお互いの演技を見るのは初めてであった。

各グループ上演・発表した題目は以下の通りであり、それぞれ10分程度の上演であった。
グループA・「チュウ太とお父さんの日曜日」
グループB・「素直になれないピノキ」
グループC・「神様からのおくりもの」
グループD・「三匹のこぶたとオオカミのおうち」

(2) 上演後の感想交換

上演会の直後、3年生の司会で今回の上演に関する感想を交換する場面ももたれた。

初めて見るお互いの人形劇は新鮮なものとして映り、グループそれぞれのパフォーマンスの感想を以下のように述べた。

「セリフの言い回しが見てくれる子どもたちに伝わるように、ゆっくりと話していて、人形同士のかけあいがすごくうまくて、見ていて楽しく参考になった」、「あたふたした感じやゆっくりとした感じなど全体にリズム感がよく表現できていた」、「人形の動きにそれぞれの演技者の個性が出ているのが感じられた」、「キャラによって声を使い分けているのが自然にできていた」、「同じペーパーサートでもグループによって製作の工夫点の違いがあり、それがそれぞれの演技に変化を与えていた」、「神様の演技には感

動した。BGMがあるだけでもすごく惹きつけられる効果があるのがわかった」、「人形の足が伸びるシーン、カラスとの関わり方など細かいところまで演技があった」

学生たちの感想を述べる様子は、自分たちが人形劇製作を通して演技を工夫したり支援したりしてもらいの中で、次第に他の演技を見る力量も形成されていることを伺わせるものとなっている。

(3) 川田講師による人形劇の上演

各グループ上演・意見交換の後、この授業を指導してきた川田講師による人形劇「はちまんさんのしろ犬」の上演機会を得る事が出来た。この人形劇は今回の授業の一番最初、構成台本および脚本作成の見本として提示され、学生たちが参照してきたものであった。

川田講師の演じたこの人形劇はこれまでの人形劇にはない「講談と人形劇を合わせたような試み」で、学生たちには初めて見る独特の演技であった。演劇はプロならでの力量によるもので、学生たちも圧倒されていた。また、川田講師は、学生たちの鑑賞する態度について「本当によく見ていた。深い関心を持って見ていることを演じながら感じる事ができた」との感想を述べられた。

(4) 発表・上演会記録と公開

グループ上演発表はビデオ録画され、授業専用Web上で公開された。またYouTubeにもアップロードされ、授業後、学生たちは自分たちの取り組みを授業外の友だちや家族に紹介し、感想を聞く事ができる環境を整備した。

13. 外部での人形劇上演の取り組み

(1) 人形劇上演マネジメント

本プロジェクトは人形劇製作を授業内の公開に留めず、授業外・大学外や外部・幼稚園などで開催する「演劇マネジメント」まで展開する事を目指していた。学生たちは人形劇上演の開催について2グループを一つの単位として30分程度の上演会を実施するため、附属幼稚園などと交渉を始めた。

(2) 学内及び幼稚園での人形劇上演

授業外・学内の発表会は「児童文化」に「身体表現(2年生が主)」の授業で取り組まれた「パネルシアター」の発表会も合わせた合同上演会が企画されることになった。

学生たちはこの取り組みを広く学内に広報するため、学務系のメールサービスを利用して学生に参加を呼びかけたり、ポスターを掲示したりして2月16日午前学内発表会を開催した。



<図3：学内発表会・パネルシアターの発表会と同時開催した>

また、この日に前後して附属坂出幼稚園(2011年、2月14日9:30~10:00)および附属高松園舎(2011年、2月17日11:00~11:30)で上演会を開催した。

学生たちは、授業内外で学生を前に上演した場合と、幼児の前で上演した場合とでは、同じ場面でも反応が異なることに気づき驚いていた。また、上演することで、学生や幼児が喜んでくれることに喜びを感じている様子もうかがえた。ここにおいて、本プロジェクトの目的の一つであった「演じる事と見られる事から得られる表現体験全体を味わい、しかも自分たちが地域・子どもたちの喜びに貢献できることを実感する」ことが達成できた。

14. 本プロジェクトの到達点

(1) 実施授業・4回を連結するWeb指導

この人形劇製作の授業回数は(研究予算上)集中形式で4回だけ、とらまる人形劇から指導を受けられる場面として設計された。当初計画の段階では、全く人形劇製作の経験のない学生



<図4：附属坂出での上演会后>

が、この4回の授業内に脚本製作から取り組み、上演までを実施するのは無理ではないかと懸念された。この解決策として用いられたツールがWeb環境による連続する支援体制の構築であった。

授業説明会から授業開始までの期間(2010年10月6日~11月12日)にWebを利用して入念な構成台本製作の添削指導が行われ、それぞれの授業期間にも課題が出され、それらをWeb上でアップロードし何度も添削され修正するなどした。

その結果、授業と授業の間も切れ目なく連続して課題を発展させたり検討したりしたので、4回の授業は個別の独立したものとしてではなく、連続する一つの授業の節目として機能し、Webを利用しない通常の授業形態では時間不足あるいは授業間を継続させることが困難となる点を充足し密度の濃い授業を成立させることができた。



<図5：附属高松園舎・上演後>

(2) とらまる人形劇・劇団員による支援

本プロジェクト全体を通して、川田講師は学生たちに人形劇製作で何をどのように進め、それぞれの課題がどこにあるかを的確に指摘し支援しながら活動を展開した。

人形劇というと、人形製作や舞台作りに目が行きがちだが、この支援全体を通してみると、人形製作は最小限で（表情や仕掛けが必要な人形は、川田講師自らが製作し学生に与えられた）脚本製作と段取り稽古に力点が置かれた。脚本製作では特に「人形劇を通して何を伝えるのか、どんな思いを子どもたちに伝えようとしているのか」を学生たちに問い掛け、決して安易な内容とならないような妥協のない支援がされた。学生たちは構成台本の段階では人形劇を「お話を脚本化してそれらしく演じる事」として設計していたのが、この人形劇製作を通して「人形劇は、演技者が子どもたちに思いを伝えるコミュニケーションツール」という原則から人形劇を再構築し、演技することができた。

(3) 人形劇マネジメントの取り組み

本プロジェクトの設計段階では製作された人形劇を、「こどもの国」の合同発表会に参加する、「とらまる座主催・アマチュア人形劇発表会」に参加するなど学外で公演することが予定された。しかしこれらの上演会には日程が合わない、期日までに準備が整わないなどの理由で参加する事ができなかった。

そこで学生たちは発表の場所を自主的に設定する活動を始め、学内発表会では講義室を借りて会場設営、学生動員、広報活動などに取り組んだ。また、学外・幼稚園での公演に向けて学生グループがそれぞれ訪問先幼稚園と日時などを交渉し、幼児たちを前にして上演会を実施することができた。これらの活動を通して人形劇を学生・大人の前で演じる場合と幼児の前で演じる場合とでは関心を寄せる場面が異なることに気づき、またグループによっては、観客の反応を見ながら演技を付け加えたり修正したりするなど演技者として成長していく姿も見られた。

15. 課題

(1) 表現力の展開

初めて取り組む人形劇が果たしてどの程度のレベルまで到達することができるか全く予測できない状況でのスタートであった。学生たちは人形劇を見た事はあっても演じる経験は初めてであったので、多くの場面で川田講師の支援を受け、内容を充実させることができた。

今回の人形劇製作で得られた力量を、次回以降自分たちだけで人形劇製作を成し遂げ発展継続させる事ができるのか、あるいはこの表現力をどのように展開させていくのか、が学生たちに問われることになる。

(2) 今後の取り組み

本プロジェクトは単年度の取り組みであり、次年度以降は今回のとらまる人形劇・劇団員による同等の支援を期待する事ができない。今回の取り組みは大学教員だけでは、とうてい成し遂げることができない企画・支援であり、「とらまる人形劇」という地域の力量ある組織・人材の支援によって初めて可能になったプロジェクトである。

今後こうした取り組みをどのように継続させ発展させていくのかが今後の課題である。

謝辞

本稿は、平成22年度香川大学教育学部研究開発プロジェクト「授業「児童文化」における演劇」活動を通じた表現力の育成」における研究成果の二部編成のうち第1部である。

本プロジェクトを推進するにあたり、「とらまる人形劇」の皆様・特に川田りょう先生には、人形劇製作において準備の段階からWeb支援、および授業内における学生支援まで多大なご協力をいただきました。心から感謝し御礼申し上げます。